

Von ewiger Freude [永遠の喜びについて]

女声独唱4声（SSAA）、二重女声合唱、オルガンと2台のハープのためのカンタータ・
Opus 1 ・ 1912

演奏時間 30 分

出版社 Universal Edition (1916)

入手方法 レンタル可能

初演 Ges. d. Musikfreunde, Vienna 1913年2月16日 (Albine Mandyczewskiの合唱団; 指揮: Mandyczewski; オルガン: Alois Kofler)

その他の演奏 Gera: Geraer Damenchor/Gertrud Müller, 1913年10月31日; 1914年2月1日
Frankfurt: Dessooff choir/Gretchen Dessooff, 1913年12月11日
Darmstadt: Dessooff choir/Gretchen Dessooff, 1914年1月14日
Amsterdam: Groot Omroepkoor/Simon Halsey, 2004年10月

作品について

カンタータ風のこの作品は単一楽章からなり、歌詞に対応して多くの部分に分かれる。冒頭にはオルガンの長い前奏が置かれる。最初の合唱の「Ach arme Seel, wie magst hie wohn'?'」という言葉と伴奏に現れ、第1部全体を支配する二つの動機が、この前奏で展開される。ここでは合唱と独唱が分かれている。2台のハープの登場で新しい部分が始まり、二重合唱「B'hüt Gott, wie soll ich das verstehn?」を、優しく天上的な音楽で伴奏する。魂は天へと飛び立つ。ハープとオルガンの間奏も、同じ天上的な響きを帯びる。続くハープ伴奏のソプラノ独唱「Ach Petre, der du d'Schlüssel hast」は、魂がペトロに呼びかける歌である。合唱はその願いを、さらに切迫した調子で引き継ぐ。この部分の展開で緊張が高まる。「Wohl steht mein Sach', Gott sei gelobt」。門が開く。「Drum noch einmal ruf ich: Gott sei gelobt」

。ここが頂点である。続いて、壮麗な天上の宮殿が描かれる。アルトが「OChriste, was Wunder ich find」と斉唱で始め、アルト独唱が続き、最後に全合唱が清新で舞曲風の旋律「Den ganzen Saal Gott selbst versicht」を歌う。その後の展開では独唱と合唱が交替する。ソプラノの斉唱「Der Teufel selbst sein Schwachheit weiß」で新しい部分が始まる。その後、器楽の移行部を経て終結の合唱に至る。この合唱は一種のパッサカリアで、低音の8小節の句が計7回繰り返され、そのたびに上声部が変化する。最後にコーダが加わり、喜びと至福の輝かしい響きで全曲を閉じる。」

Dr. Hugo Leichtentritt (Berlin) 。

[この作品をウェブサイトで見ると](#)